

特110

695

曲譜
正調

筑前琵琶歌

水也田旭嶺
月



始



特110
695
序

近時我々の前には琵琶は旭日昇天の勢い

地亦一家庭音楽とて紳士淑女に歓迎せ

られ一方は劇界に近も琵琶琵琶の如く

月す多福永年一々茲數年間に急進の勢

展成りたが之に伴なり琵琶琵琶の其有るは

山麓の如くは折りまする志かながら曲譜の止



一、文章の間違の母、完全なる著書其の母、
 實に嘆か、わ、い、事、を、
 茲に於て、海、志、が、多、年、一、研、究、し、
 譜、代、附、春、(幼傳)夏、(中傳)秋、(真傳)冬、(皆傳)及、
 雲、月、花、の、七、卷、に、分、か、り、お、ま、り、
 す、な、れ、ば、い、ま、あ、り、ま、す、

水也 田旭 嶺 識

曲譜及曲節

一、二、三、四、五、六、七、甲、乙

音 調

今 合の手の譜

フ 流一の譜

春 春 節

夏 夏 節

秋 秋 節

冬 冬 節

山 旭 ク ツ 月 夕 天^風 ？

山越節

旭節

雲節

露節

月節

夕日節

大落小落

憂愁譜

火 山 天 丁 鳥 金 水 土 木

悲哀の譜

崩勇壯の譜

五絃節及十二段秘曲の合手

吟變(例せば五六の中間の声)

續 さい

歌又は歌の類

詩又は詩の類

琵琶の合の手

番、号、丁、鳥名、木、火、土、金、水、地、天

Handwritten scribbles at the top of the right page.

淘^チ伸^ス上^アげ
伸^ノべ上^アげ
淘^チ伸^ス下^サげ
伸^ノべ下^サげ
抄^シひ上^アげ
強^{ツヨ}め
大^{オホ}廻^マ淘^チ伸^スべ
淘^チり廻^マし

目次

實 威	一頁	名鎗日本號	五六頁
蒙古の寇浪	九頁	全州南山	六六頁
千手の前	一七頁	弓矢の譽	七三頁
船坂山	二四頁	袈裟前上段	七八頁
濡衣	三六頁	袈裟前下段	八六頁
小松原	四五頁	小督局下段	九三頁

旅順の魁

九九頁

筑前琵琶歌

月の巻

水也田旭嶺編纂作曲

實 盛

(五柱曲譜)

俱利伽羅峠の合戦に

平家は木曾に打敗られ

加賀の國篠原に引退み

人馬の息残休の

獲も源氏に攻られた

終に散々に打なされ

都の方へ落行きけり

此時平家の侍大将

齊藤別當實盛は

縦横無盡に奮闘する

赤地錦の直垂に

鉄形打たる冑の緒或端の

連錢葦毛の馬に乘たり

夕陽も入相のおねえ

古郷に飾る綾に

唯一騎を踏止まり

其扮装が花々

萌黄緘の鎧著て

黄金作の太刀或佩き

頃は壽永二年五月廿一日

覺悟の上の實盛は

やがて此世の首途と

おもひ極むる折もわれ

實盛目指し馳来り

四方の正執は皆落候に

以名姓名乗給へ呼ばり

先づ元宣ふ和殿は誰ぞ

是は信濃國の住人ぞ

名乗る姓聞きし實盛ハ

木曾の方より若武者一騎

アテ優しう見之候が

一人残らせ給ふに

實盛纔に若武者或願

最と鷹揚に問返せば

手塚太郎光盛なり

さては互に好し敵なるが

但一和殿戎下るには非ざら

今は輒く名乗るまじ

手塚の郎黨横間より

齊藤別當無手組む

忽ち敵戎捨伏せて

此時手塚太郎は九手傍

心得なりと實盛あ

ふかき仔細の候へば

寄れ組んとする處に

主戎討たせりと押隔て

實盛微笑戎湛へつ

頸掻切て捨てけり

エイヤと實盛に組付けば

金剛力戎振り絞り

志げ馬上に探合けり

古稀戎過かり老武者

終に光盛に組敷かれて

元より手塚太郎光盛は

やがて義仲の足陣に参り

光盛より稀有の面者

又大將軍かと思へど

はやるいへど憫まや

いかゞ壮年の武者に敵

首戎あち上げられすれ

實盛なりは露知す

跪きて申上げけるは

侍かと思れば錦の直垂戎

續ける執事も候はず

名乗れいへ遂に名乗す

恐ながら覚に供へ奉る

木曾殿之れ見給は

我幼時別當の恩恵に

爾後絶之相見されば

樋口郎は幸願渠と馴染れ

兼光召せ迎召されけれ

声は坂東音にて候は

實盛が首は前より先向けり

いはれ齊藤別當にてはなから

不思議の運命は開き

られともよかかか難

よくぞ見知りたるらむ

樋口次郎兼光は

實盛の首は見え

涙はながし申ければ

さばれ兼光よく検よ

今ははね七十に餘るるに

兼光志ばし肯やつ

言葉は豫て遺言とい

凡そ武士とて平に餘り

子無湯は是は着候別當に

我仲も暗涙は浮めさせ

まはし實盛にてあるならば

鬚鬚の黒きは如何に真

弓矢取る身はおもひ出

實盛毎々申候には

軍の陣に向はんとすは

萬代通ふよろらび乃

斯る目出夜大徳代も

蒙古の吏忽必烈

我日の本我押領せんと

志ば使者送る来

我朝貢あが責たりける

いともたふとけ玉體我

声は雲井に響きけり

花に嵐のならむかや

暴威の翼張りいろげ

文永五年の末よりい

國書我致れおけなく

たればお多も天皇は

北國難に代へ給はんと

伊勢の松はみかみよ

阿はれ恐あや敵慮なれ

北條相模守時宗は

決戦の勇断は世に示

まさり筑紫の海濱に

諸國の武士に告げるは

平開以来阿なかり我

祈りまり給いりさう

去程は當時鎌倉の執権

無禮は怒り使者致斬

公私の用致れ節減し

警備をさし怠りなく

悉くも我日の本は

外國に受けざり

蒙古の寇浪

蒙古暴威戎肆に

抑外寇は源平戦亂の如き

實には國のは大事が所

盡すは今や此時なり

真心をあらし諭しければ

筑紫ながさの海岸よ

實に菜島と名に真ふ

我國に寇為すや奇怪れ

本邦内の叛逆と異り

武士なる者の本分哉

誓て國威はな穢し

諸國の試支傳へ聞

雲霞の如く寄り集ふ

いつりし名もたつ浪の

たらの濱に寄り千鳥

落つるは露か玉にけ

涼し風もふく岡の

誰にか見せん姪の濱

いさむ大和の人の花

時あり来たれ弘安四年

蒙古は斯共ら浪哉

啼く音も玉代の松原や

箱寄ふへ博多馬

磯に何ぞうてぞ飼哉

壹岐の松原さくく

いさや今津に顯れむ

自年中旬の事なりが

波りそよへつる馬

蒙古の寇浪

一三

一一

六 十萬の兵四千の船

七 さいもに廣き海原も

八 立田の川をわはすぶと

九 豫二期たる事なれば

十 敵の害する我待つるに

十一 銅羅鏡鉞我打ち鳴り

十二 我も貝鐘ひかかせつゝ

十三 船艦相衝み押寄する

十四 嵐に散り紅葉葉の

十五 船に浪さる見おぼりけり

十六 我軍毫もたどらかず

十七 象攻たのめる賊軍は

十八 ひたしと漕ぎ害のなり

十九 ドット関我が合せければ

二十 山や崩れん地や裂け

二十一 凄く事かざりけり

二十二 矢玉我くゞり奮戦

二十三 賊軍我を一步だま

二十四 勇我鼓をた戦ひける

二十五 午の刻許りになり時

二十六 伊勢の神風吹き起り

二十七 潮は湧がごとくい

二十八 されど余をよめ武士

二十九 六十餘日のりのあひだ

三十 我國土我踏すめず

三十一 かくて関七月一日乃

三十二 一天俄にかさくもれ

三十三 大木我倒岩石我飛

海中怒濤はわげれば

一夜に網は断ち切れ

右往左往に吹きみだれ

皆盡个づみあられれば

底の水層となりけし

それは味方は凱歌はわげ

我大君もこのいふも

つなぎ合せ賊の船

秋の木の葉の散る如く

岩に當り浪に碎かれ

さうも十萬の大軍も

唯三人のみ生り残れり

御代萬歳は祝ける人

どもに心はつくし鴻

つぎぬ功は千代かやい

ふどりのやます榮にも

西國の光や仰がるらむ

千代の松原とよきはよ

西國の光や仰がるらむ

千手の前

行水の溜瀬と変る習

主相國清盛が

西八條の館なる

榮花の夢もかげらふの

入る日の草に消えゆく
都戎捨て落るる者
身は是れ三任中將の
かげも知らぬ方なほ
鳴くや牡麻の津の國の
武運独なく生擒れ
思ひおろだに哀れなり

名にう惜しき一門は
わら痛けや重衡郷
其古は雲の上
月の夜すが声たて
生田の森の戦は
心の外の都入り
此處は何處がハッ橋の

雲井の都よりか又
はるく越ゆる足柄上
今は涙も曇るる人
南都炎上の科あれば
絶ゆるは明ら星月夜
なれも妻戎残りぬ
元の花月眉

三河の國や遠江
大磯中磯見涙せば
身は朝敵のまらへ
程もわらせず玉の緒の
鎌倉山にぐ入りける
憂きふもげ旅なれば
いと曇るを見ゆる

六 頼朝あはれと思ひけり
都

五 暫しが間とて預けられ

三 いたはり申せとつかあさる

雨蕭々の夕空に

宗茂酒はすむれば

千手は琵琶をうりまわす

千手は容顔美麗なり

四 将野介宗茂は

公が侍めたる千手は

時にも復の初め方

情も涼き盃は

頼朝公の酒後とて

手越の長者が娘なる

心様さへ優しきが

楚囚の名残いとはし

重衡卿も琵琶をうり

阿はれや君が調べ緒の

捌き兼ねたる胸の中

燭燭數行眞氏涙

斯く歌ひつる重衡も

都の花と栄えり哉

朗吟淫ふらなり

暫しが程は弾き給ふ

撥の捌きは輕けれど

びるもや重く思ふらん

夜涼四面楚歌声

實にわがまや昨日迄

今日は東の空に來て

千手の新

二一

忍ぶに堪えぬ雨の音

移れば変る世の中や

同流れば朽ふだふ

干手が歌い其じろ

燈暗琵琶彈試彈

可憐胡蝶真情種

かくて孟重ぬれば

志ほる袖の色みても

一樹の蔭に宿り合ひ

みな是れ他生の縁ごと

如何に聞くらん東人

楚囚自作楚歌者

一觸春風恋牡丹

更け行く夜半の時鳥

琵琶弦枕にたねの

明くるに早夏夜の

勅夜なれば詮方も

其後朝がいたまひ

可惜盛散る牡丹

契り縁仇といふ勿れ

君なき我は何ぞ

夢も程なく東雲の

短き契りも合はせ

涙の露の袖と袖

牡丹よかあ良の都の夕嵐

哀れ一夕遭逢乃

見よ花の衣も合はせや

涙の雨のちやみな

中
嘆きに沈む人阿る哉

三
やつれ安も墨染小

六
とむろく人有り難

信濃の國の善光寺

五
重衛卿が亡き後哉

船板

山 (五經曲終)

一
凡る國の爲に身忘れ

二
忠孝義烈は日本の本

三
難に臨みて節に死す

三
實に芳ばけ花が

六
爰に弟池肥後守武重は

四
横暴掠奪は極めがば

三
京都城立て筑紫なる

三
おれも建武弥生の共

中
雲かともかふさくら花

三
勇氣凜々も武者押の

播磨の國にが着たにけり

五
足利尊氏九州に借み

四
朝敵退治の倫旨は賜ひ

四
本國さしをが下りける

春
長閑に霞む野も山も

三
散るは措まぬ大丈夫の

三
駒の足搔むと早く

四
去る程に得平因幡の守善光は

四 元寇以来朝廷子

四 其賞薄きに怨致懐き

四 再舉城勸むる折からに

三 菊池城船坂山に要せし

三 秀光異議なく其意を領

六 茲に秀光の奥方綾羽の方は

三 亂れたる世の習ひとて

四 樹より勲功の甲斐もなき

三 私かに歎致尊氏に通

六 赤松入道園心より

四 急使頻りに至りければ

兵馬の準備致急ぎける

五 心の中にとつ追ひつ

三 血下血致洗ふ戦ひも

五 止むに止まれぬ事ながら

七 夫も貞なれば兄は失ひ

三 貞義併せ全ふせんには

五 とみに思案致定めつ

四 此後菊池執河伐の事は

三 妻討手の大将としく

六 數なねども武士の妻

六 さいもつたてり世の様よ

六 兄に義なれば貞なはず

三 身致殺すの外なりと

三 夫の前に進み出で

四 少り思ふ仔細もあれば

四 見事武重致討取り申え

五 たとへ兄妹なればとて

卑怯の振舞致すやど

動く氣色も見へれば

船坂山の要害

今や遅しと待ち掛り

かゝる備への向りぞとも

山上遙かに眺むれば

這はるもいかに朝風に

減攻籠の言葉の色

秀光遂に之を許す

陣戎構え兵馬に備へ

神ならぬ身の武重は

知らず麓にさかり

思ひ設けぬ敵勢に

吹き翻へす旗の手は

得平勢が知られず

憎ふも秀光が振舞がな

焦つて葉室内藏之助

たゞ急敵と味方に別るも

委細の由は聞えなは

由無き戦いに兵馬は換

由々々大事に凍むれば

見るより武重大に怒り

イテヤ一擧に踏み破れ

馬の轡は引きとめ

親み深き得平殿

よも理不盡は致され

行手の障りこなりは

武重げにもど打點頭

船坂山

廿号

阿佐古兵部或馬前に古

兵部は命或畏みて

主君武重今夜の下向は

本國の危急或救た外なき

兵馬の間に見申るは

速かに陣或撤せられ申す

得平秀光と思ひまや

使者の役或が命トす

敵の陣所に奔せ向ひ

畏今も朝廷の綸旨に依

てれば茲にて名もなきに

骨肉相食む汚りや残さ

懸て立出る大将は

年々若手弱女の

紫紙に身或體ひ

是は常陣の大将なる

兵部或引見て莞爾と笑

内縁の義は松事

手に入る敵或逃がせり

史秀光末代の汚名なれば

雄雄或決して通り河は

悠々として控へるは

綾羽の方と知られたり

使者の趣はさる事ながら

妾の縁にひかされを

赤松殿に聞はなば

勝負は兎にも角もこれ

此由兄上に傳へよと

いゝと雄々敷も谷へたり

女の義理立は腹痛

朝霧鎖す黎明

武重自ら中軍隊率い

敵も先途と鍋釜削り

山も崩れ人計りなれ

一度にドット攻寄すれば

武重聞て益々怒り

さらば望みに任せんと

味方の勢は三手に別ち

無二無三に肉薄す

矢叫びの音岡の声

時計計を左右の伏兵

上段下へと混乱

手向ふ勇氣も何らば

元より好む戦いなれば

難なく山が越へにける

汚なき味方の振舞かな

揚鞭揮ひ追ひすがら

武重弓矢押取りつ

腕の冴はは程はねど

四途路もどろとなり

菊池勢はかけぬけ

綾羽の方は馬上に声振り

イテ追ひ打と真先

返すも憎つる妹と

胸板目がかけ粗矢の

縁にからまる恩愛の

糸に心も亂れ髪

斯くして何るべき時ぞねば

兵と放ち一弦音に

花の姿は馬上より

數多の郎黨走せ寄り

綾羽の方静に制

立ち其矢成其まに

引きも放たで踏踏か

鈍る心成引絞れ

四辺眩き大将の

大地に撞と落ちにけ

助け立てんと特く成

兄の手向の賜もの

やをら矢立成取り出

色も香も濃き水菫の

義理と探の振分けも獨

妾の減酌みよはと

節もすなをの矢に結い

同ト思ひの鳥の跡

さーもに猛き武重の

霜に萎る白菊の

心の駒の狂ふな

踏迷おぬを情れと

文に残す言の葉成

着け一程の片袖に

兄にたみの一品は

旅路の夢を破る之

色は褪せても香は

烈婦の最後以後の世に
語り傳へて残さなむ

四ツの調べに傳ふらむ

濡衣

抑九近侍將監大友の親世は
筑前の守護となりてより
夫人は之の息女春姫を遺す

父祖の名譽の後世に
冷泉の津には一い
唯かりりめの疾病に

取なく死去させければ
妻をば還へ給ひけり
後の母にも愛せられしが
女の児を擧げ奉りて
射る矢の如く過ぎけるが
生一我子に代はらひ

程經て親世は継配の
此時春姫はめで十三歳
継母はいつか懐妊し
斯くて三年もたつかう
追ひつゝの母の怒
豊けき榮華見んものと
去程に奥方一味の家来共

一夜密にりめし合ひ

撃つ真似しが舞はば

仔細如何と問ひ給へば

さる人の依囑に由り

さうば誰人に頼まれが

曲者遂に答ふるには

春姫君はかねてよれ

一人の曲者引捕へ

親世支婦も出下来り

曲者臆めたる氣色なく

奥方殺すために忍び分

疾く言へ聞えと問ひ追われ

申すも忠多けれども

奥方は調伏共とて夜ふし

妙見に祈誓せ給ひ給ひ

殺すよこの御依頼

姫は途中に逢ひ給へば

御検め召さるべし申けり

諸もなまぬ中は言ひ給ひ

失はんとはしるるがや

亡き人の子と思へばこそ

靈験今にあらざれば

証據といふは今宵の雨に

必ず衣や濡れつらむ

奥方聞きて泣き伏し

何咎ありとみづかり哉

子は子にありと子にありぬ

萬事に眼ば懸ける哉

六よ、ご汗りにむせび入る

親世は不審の眉は打ひり

雨に濡りーのみならず

備はと愕り又親世は

實に痛しや春娘は

夢にもろよとーら川の

唯スヤくと臥居たり

道理めきて聞えけり

先づ娘の衣は検めり

砂に塗れ汚染も有り

深き悲に沈みけり

斯る隠謀の何らんとは

流以下る夜半の舟

やがて親世は荒々

四娘の寝所に走せ入れば

四父上如何召されしと

四雨は今宵何處へ出つえ

四娘は寝耳にみづからは

五傳しと答も聞きおへず

四母を咀いに出下りし

四高は其上に人手頼み

六春娘がどろり眼はさす

四いへど親世は声鋭く

三隠ます申せと宣ひたり

六何處へも出下候はずと

四それ其衣は何ぞ濡れたる

四証拠と誠に知られたり

四母は失はんとは何事か

新も浅猿の非道の子

烈しき怒に帝も多し

正しく濡る濡るも

言へぬ義理の

泣くより外なかりけり

何の因果かいと子

鈍る柄元にならざる

思へば世にも恥か

衣服を見ればは

着せしはすべが彼の人

娘は合疎せすべも

陽に怒る父親も

又の鏡に為す事

心に泣きけり後放

娘は一ぱと取すがり

冤罪の汚名は身に負

されど是非は喃父上

見上る顔と見下す顔

十六歳は一期と

斯くも娘の成敗は事治りが

父の枕頭に現はれ

死ぬる生命は惜からねど

逝くはなかく口惜

是や此世の別れと

落る涙ともろとも

花の蕾は散ら

ある夜の夢に春娘は

着せられて干すももなき濡衣は

なまがき 眞土の子けりなりけり

斯ん言いて潜然

泣くよと見れば夢覺

後日 至り妻の隠謀を

親世は終に世後心

佛の道に入りけり

手向の水や涙は

流れて盡りぬる石堂川

いと哀れの碑は

濡衣塚と今も尚ほ

川のほとりに残りけり

川のほとりに残りけり

小松原

故郷母をり秋風の涙

前路人を夜雨の魂

實にや凡夫も聖人も

忘れ難きは又母の國

孝養厚きは祈願に

母君は惱平癒をり

今は心もやすりと

歸倉の告別申す

大聖人は葦原房子

其歸るの黄昏時

鏡忍諸共五七人

頃は文永元年霜月十日

建長己来の法敵とて

おも有らばと跟け祖ふ

數百人の雜兵引られ

道善老師は訪ひ給ひ

供には乘觀長英

小松原の大踏に羌掛る

此に東條左馬頭景信ハ

深く高祖は嫉み奉り

日頃本望此の時なりと

踏込夾んで待伏せたり

つら哉乱せしかりか稱ま

道に敵ありと覺申るが

ドブ喚めし打出づる

射る矢は雨の如く

不意狼藉象寡敵せず

から中にも焼忍阿闍梨

手頃の松哉曳抜い

只いぶかりと歩み止め

方々用意じふ内小

人馬の物音聞の声

打つた刀は電の如く

危し何れも計りな

法衣の袖は打ちからげ

背より幸い難立蹴立

小松原

四六

六 群る敵戎物もせず

五 大厦の二本是非もなや

四 斯る朽も天津城主

三 北浦忠吾忠内乃

二 かくと見らる躑躅せず

一 イテヤ怨敵承けれ

國の程に仇なす奴原

六 仇戎防ぎ剛勇も

五 支へ兼ねるが悲慘の最後

四 工藤左近五吉隆は

三 二人戎具を口出迎

二 其供敵に斬り入

一 工藤吉隆此に有り

目に物見共覺悟せよ

六 縱横無盡に斬りたる

五 實に金剛の信念に

四 多の敵戎打ち惱す

三 此に怨敵東條尤門

二 いか日蓮日頃の恨

一 打ち下りたる剣の電

我嚴に狂ふ太刀風は

六 勇取無双の武者振ハ

五 研り出せ武者光

四 遂に其身に數所の深

三 疾風の如く馬のりかけ

二 今日只今思ひ知れと

一 雷と車轆く下れの喝

眉間戎かすめて疵三寸

五 走る血潮の光明に

五 身体すくみ馬より落ち

六 大主人の一大事

五 玉紋投けし散りよ

五 消えて跡なき鳥谷の鳥

五 互いに甘き事は扱も糸

五 嬌や恙きりまよふ

五 眼くらみて東條景信

四 血吐吐そさう仆れける

六 老黨組子等周章狼狽

四 闇に散りけりお火の

三 声残るべに供の面々

四 大聖人の心身の上

四 歳徳に敵は去りけるよ

五 浅けれども頭のは疵

五 少年早く天津の館へ

五 否りよ我は浅疵なり

三 唯傷のき月鏡忍ぶ藤

五 華散散りて結ぶ實の

三 敵に委せんは本意

三 先づ日曉に葬れ

六 更けけり夜風如何あえ

四 どの供と言上すれど

四 身命すべに何條なり

三 法の為とはいふ作ら

三 佛果に協り彼等が屍

五 せめかたみの據る

六 吉隆最後は近

一 我一言の告別せん

二 二藤加耳に口よせ

三 日蓮なるが吉隆と

四 聖者の梵音涼やか

五 吉隆吃と自見開

六 尊体は無事にす

七 吉隆武運拙なく

一 深手に息も絶々

二 尤近心哉ながらせよ

三 二声三声呼掛け給ふ

四 心腑に徹る慈悲の声

五 あな喜しや大上人

六 怨敵今は散らたれ

七 象寡敵せず此深疵

一 敵は一旦退き

二 片時も早く此處去り

三 吉隆終焉の願には

四 若し男子にて

五 哀れ弟弟子の一分に

六 生々世々の思出

七 一語一語にすぐれ行

一 再舉の謀計測り難

二 天津の館へ入る給へ

三 わすれは身の吾一子

四 我れに代り生涯給仕

五 加へさせ給はらば

六 愍み給へ大聖人

七 声は枯野の虫の息

五 かすかに通小題目と

妙の響音や法の海

玉と碎りて世は照す

いづれ劣らぬ壯烈は

捨身の誓曇りなき

鏡と玉の光と剣

六 散る叢雲の絶間には

三 涙に曇る御經の

蓮華が潭の波音も

九 近が法名日王上人

末代信者の鏡と式

鏡忍阿闍梨日曉上人

四 園も晴れぬ夜長川

剣の月の影冴へて

夜風にろよぐ瀨萩の

つらぬ名残戎袈裟掛の

菩提の松や小松原

法の操の深みどわ

活ける女女の語り草

千代のあらべと傳へけり

招く間にいづささらば

松にかたふとらむりたる

今より千代の薩珠まつ

染めぬ血潮の墓標

四つの緒毎に引きさうつ

千代のあらべと傳へけり

名鎗日本號

三

扱ても尾州清洲の城主

福島左衛門尉正則は

智勇兼備の大將で

時の開白秀吉の

殊の外なる寵愛に

恩賜の鎗は軍功の

引出物に与給ひける

されば左衛門尉正則も

深き恵が身に餘る

大岡殿の賜物哉

世にも稀なる寶とて

朝な夕なの起伏も

なづくに掛けぬ給ふ

是が名高き日本號

日の本三鎗の一つなりける

世は慶長の時津風

明ければ七年寅の春

枝も鳴らさぬ太平に

民の喜び限りなく

聚樂の館は年月よ

彌榮へますため

正則殿は陣中よ

家臣の面々打集る

祝のさかづり酌せけり

吉村又エ門義勝や

名高き日本號

五十六

大橋長右衛門貞知等

綺羅星吹敷ばかりなり

身の丈六尺のまより

黒田軍斐守長政の家は

室の正淀がこみ折地

早や帰らんとすけるに

さ、も天晴の殿振りや

鎧かぶりの粉装よ

中に混れる武士一人

あたり吹拂つて見へけるは

其名も高き母里祖馬

使者の役目も果てたれば

正則殿は声吹かけ

黒田八家の其内より

剛者一と呼ばれたる

日頃のなみ喫や喫

言はれて但馬は平伏

酒は性来不調法

正則不興の面色

弓矢取る身の月なほ

云い甲斐なり朝

但馬程の者なれば

一献酌んで見せよが

酒あはせがあければ

平に免と退く

聞ふに方る但馬かな

敵にうらみ見すまは

但馬は漸く座敷

五 是は情なき御流に

敵我避けに何うねども

四 無理な云ひがとみぢ

然らば酒は酌ますま

首改さげて降参と

但馬程の剛武者哉

五 祝着これに勝る處

四 戦場の習ひ武士乃

日頃たし酒なれば

三 正則益々声何ん

其のありに今此處で

一言詫びて一から

六 屈伏させなば正則が

いかんとなぞられ

但馬はやをら身改起

いざ戦場の掛引に

控ぬがすいそぎよく

七 是非に何らば黒田武士

若し酌みすすむ其時ハ

四 耳その正則ほ笑み

望みの物取らすべ

三 さとも殿にはは難題

四 も一萬一の事あらば

腹掻割そ相果

六 いかでためらふ申す

殿の正所存いかなら

四 されば其時らり

六 考矢ハ情勝負は之持

七合入の大さ五の十二づ春

阿ふれんばかりに酌みをとり金

百川吸ふが如く水地

三杯ほど乾しければ

主の気色如何とす山邊人

コハ流石なり黒田武士

約束なれば其方が

但馬は両手に押し頂り

只一息に長鯨乃

あともくと打ち重ね

一座の面々興さめし

正則ハタと膝打打ち

見事々々と賞辞あり

望みの品取らず銀々

此細首のやせ腕か

古事今にたふめ乃

望めと何りければ

なげに掛けて指し

取つて甲斐なし無用者

明日我も知らぬたかたの

サラバ日本一の彼の鎧我

値は源三位頼政乃

心にかなむ者何るか

但馬はあたり我見廻し

般の首我もかいな我も

まいや弓矢取る才の認む

はかなき契り我結ぶ金々

所望致し帰る地

微塵こぼろいるまぬ一言いちごゑよ

折角せりやくの望のぞみなれ共とも此この地ち塘ぢやうハ

家いへにも身みにもかへがたき

池たにの品しな望のぞめと否いなみける
十ラ春

さらば何なに残のこか申まをすべし

之これ尾お張はり大だい名めいの避ひならか
下ト

八はち萬まん石ごくの大だい名めい残のこ

流石りやうせきの正則せいそく脛すね残のこ清きよ人ひと

太閤たいこう殿どのより賜たまわりー

我わが大切たいせつの物ものなれば

但馬たぢまは言葉ことば改あらためて
十ラ春

武士ぶしに二言にごんの候さふちは

但馬たぢまが賤いやし身み残のこ以もつて

只ただ一息ひといきに吞のみふせーは

武士ぶしの冥加めいがに候さふちなり

正則せいそくばーと押おし止とどめ
金ト

何なにとて二言にごんの候さふち又またき

但馬たぢまは夢ゆめの心こゝろ地ぢト

淫ひい柏子ひやくしの節ふし面おもて白しろく

日ひの本もと一の此この鎗やり残のこ

今いま様さまれが誠まことの黒田くろだ武士ぶし

イザなんとなけり残のこ

短た急きなせりすうをの

早はやや持もち行いけとりければ
小地

件くだんの鎗やり残のこ引ひりかろぞ

酒さけは吞のめ吞のむなば

吞のみ取とる程ほどにのむなば

君きみの陣じん屋やと帰かへりける
下ト

其功績は今も猶
武辺の花となつられ
調に残る目出度けれ

呑み取り瘡の名と共に
語り傳へし四つの尾の

全州南山

板も清國遼東半島乃
難攻不抜の要害とて

咽喉扼す南山も
所謂一丈是に當れば

萬夫も進み能はざる

實に屋竟の關門なり

然るに露軍は北山巔に據り

堅固の防備を施し

我皇軍は撃退せむと

勇一げにも待ち掛けたる

己に我第一軍の一枝隊ハ

普蘭店一帶の地を占領し

敵の連絡を断ちければ

徐かに軍議を凝らし

敵軍攻撃の準備が為なり

時より来れ鼻月閣

二十五日の真夜中に

全軍陣地を出發せり

四 逆巻り寄する執事

押し崩されん許りなり

忽ち閃めく電光

五 暴風起り猛雨来り

先づ金州城攻め落せり

狭霧が洩る朝日影

いと目出夜有りさやに

中 さいも嶮岨の南山も

折しも一天捲く曇り

轟き渡る雷渚と水

六 咫尺辨せぬ其機に凍

七 此特夜はほの明け初め

西國の旗音視る如く

味方いよく勇み立ち

山の麓に押寄せたり

大砲が備へ着る

又鉄條網が張り繞り

空飛ぶ鳥にあられば

さばれ我勇敢な軍隊は

五 第一師団が中央に

第四師団が右翼に張り

敵は地の利に據れる保壘に

其前面に數々の地雷を埋め

警告備オサる嚴重に

輒く近づくと見せり

六 少もためらふ色もなく

第三師団が右翼に備へ

敵の陣地を取り囲む

七 やがて開くや西軍の

五 いつか勝負も向うの

五 意氣衝天の勇戦敵

四 筒先下り打ちあらず

二 向はれバタと撃倒する

五 幾度も強襲を繰返せ共

四 頗る苦戦に陥りたり

六 砲戦互に優劣なく

六 血争に湧る關東武者

六 敵陣目指し突撃せし

四 敵の射撃に堪り得ず

六 残念なりと新手で替へ

六 鉄條網にさまたげられ

三 我九翼の第三は悉く

二 敵の包圍になやまずれ

五 残り少なくなりつれど

七 見せむや三河の武者振る

四 折もふれられ金砂湾の陣

四 第四師團に力尽せ

七 敵の左翼に打ち注げば

四 遂にひるみて沈黙す

二 携へけり一彈薬も

六 むかの谷残るに

五 砲火を冒し突進す

六 進みよりたる我船隊は

四 つかれる如き猛弾を

六 下すが頑固の敵軍も

四 しがや猶豫も向う破

波り群がる浪速の勇士

最と易げにも攀登り

國旗攻ころはつげたり

驀然敵壘に肉薄

敵我縦横に薙ぎ散ら

ドットつげたる三軍の

時に夕陽渤海に輝き

巉巖絶壁物ごもせず

首尾よく敵陣集む取

たふれはせり第一第三西は

剣尖交る激戦小

全く南山攻め取

勝関天地に響きなり

明月和尚山の上に懸り

日月ともに皇軍の

慰勞ふ如く見えたり

世界に隈なく影さ

仰がぬ者なりなるらむ

名譽の勝利は言祝いで

嗚呼我日本の國光は

仰がぬ者なりなるらむ

弓矢の譽

頃建武三年の

世はすみだれの空模様

逆賊高氏西國の
 凶徒成りたるに攻登る
 之が打手の大將は
 新田左中將義貞卿
 荒波寄する和田岬
 旗さしものも凄まじく
 風にいらいめく海と陸
 両軍猛虎の勇気張り
 雲のうば打んと相共に
 睨み合せて居たり
 かくる所は只一騎
 本間孫四郎重氏
 紅毛下濃の鎧きり
 黄瓦毛なる暹り

馬に跨り波際より
 立ちを沖へ打向ふ
 大音揚げて呼びけり
 足利殿には筑紫は
 上洛なれば定めし
 鞆尾の道の傾城は
 多く召されて候はむ
 酒宴の肴一鱸哉
 推して進ませ申さなん
 未げは侍候へ
 云いつゝあに上着の
 征矢被取て重藤の
 弓に矢つがい少ねかげ
 駒成駐めていろみつ

空立つ鷄魚は見え
 敵は本間の櫓は見て
 いか下鷄の射らるべき
 笑す彼我恥しめん
 味方も若しやあやまたば
 互にかたづか呑おたり
 落ち下りぬと見る内に

飛下る我は待居たり
 ニックキ武者の振舞よ
 射はるゝらば一笑
 舟は並ぶる有様よ
 弓矢の恥とあやぶみて
 折れも鳥は忽ち波の上よ
 二尺のまりも河之かと

思ふ魚は皆一掴み
 見るといれし重氏と
 馳すまゝ共に胸の内
 射落さぬと思いつ
 数石と信羽射切れつ
 大友の船の屋形に落ちたり
 射手の其名は知らね共

沖の方へと飛行
 駒は河ほりて波際に
 今立つ鷄生ながら
 わらしは我定め放つ矢よ
 魚は掴んだ其儘よ
 七拾余艘の敵の船
 船はたたく賊兵に

味方の五萬の官軍は

矢音と共に後の世は

響き渡り残るらむ

射たりと叫ぶ声

響き渡り響き渡り

袈裟御前 上之段

麻衣追ふ頼丈山見ずはやる猛丈已哉知らず

智者も千慮の一失有り愚者も頓悟の果報有り

色即是空悲無常 賢者凡丈も煩惱の

羈絆や揃む萬のら 時雨に染まぬ松城も

紅葉の色と河やまらぐ 手折見ありふたれ

諸も九近將監持遠の遠見 遠藤武者盛遠は

津の國渡辺橋奉り以仰付れ 此夜橋の遠業後工を奏

重子恩賞以下賜りたば 實は身に河やまら悦の

錦衣もよ盛遠は 花の都に馳せのぼり

三 祝の苾苾ひひ弄あそけり

中 松は婦めかけ夫とのたのしにも

夏 けおの宴會うたげの樂たのみ哉

ト めぐるさかづき影かげ河かを

五 かをり申まをかゝ舞まの袖そで

三 媛あやにかゝる君きみが代よ村

林 換かづともつね巖いわがと

春 かる折かりも相あ生なの

ト ひかる千代ちよの姫ひめ少こ松まつ

中 うたへやきかん菊きくの酒さけ

七 かつらの花はな哉やかゝり宛つ

三 なむくも返かへすも面白おもしろの

五 天あまの羽はぢろも稀まれも

中 調しらべも振かりもいと妙たえに

舞まいあさのなる海うみ羅安らあん

紅葉こうは哉や照てらす夕ゆふばへの

かゝりけるまが盛遠せんとほは

忽たちまち叔母おばの衣ころも川がわに打うち向むかひ

何なにとやえ見み知りたる人ひとなるが

真顔まがほになりと問とひけれぞ

三 何れあうは娘むすめ装束けつそくの前まへ

緑きどりにまどる一ひとともとの

ほのかに匂におふ風情ふうせいなり

三 ちろろになりて見みとれが

是こゝ喃のいまの舞まの上のうへ藤ふじは

ちも誰たれ坂のの息女いきめぞと

叔母おばはかゝり打うちおほ

五 五いつッつ六むッつの頃ころまが

りなたと興に遊びし縁

いはれて盛遠大に懐き

逢いも見せすざり間に

大人風といふ美麗や

ますらたけの魂魄も

斯く盛遠叔母君に寄近き

未々夫婦に為すべし

よりけりげなき言葉なり

さては十餘年あのかた

変れば変る面影の

身に染む恋の初風に

吹きちらされ許りなり

我幼少の時袈裟衣前とは

父将監ののたまひし縁

小耳に篤とわげ候

首尾克くはせ給はれ

叔母君微笑たまひ

幼な時々の根な草

妻よ丈よと呼ぶ事は

いかに袈裟衣前には

二つに成りし子まゝある

さいはらふ今夜夫婦の盃

思ひ入りを申ければ

やよろれは誰人も

離ありびのたはむれ

誠に向らぬ言葉なり

源の渡といふ智取

由なき事成はばより

四 世の縁嫁にささるる

波風立はず取らせども

何先だつて聲取取り

袈裟の前もよく聞かば

断りもなく他人と添ひ

今こゝにて妹脊の契

命にかけてささるる草

袈裟にまらばる衣川

盛遠さへも入ればなり

子もまふけ候や

いひなづけける某よ

女の道に飲けぬは

取りかへ給はれ

いもあらどなも申ら火の

三 嘆志のけむりたつかろ

袈裟の前は母君の寄

婿敷様にも侍れども

かへすぐも叶ふぞ

根より思ひ切り給はれ

竈に家路に歸りしける

振りすゝ歸り給いよ

四 司かんまふ色もな

足はぬ妻は尤思ひ給

すすがまらるる夜衣

道にたがひ悲草の

理りせめ宜いつ

何情なる人お是程まら

とくもかくては夫婦が

袈裟の前

八五

八四

五 ちろ心も黒髪も
五 何おもわぬ鳥羽玉の
三 悪の闇路はなごりけり

四 乱れくけの跡暮い
六 悪の闇路はなごりけり

袈裟の前 トと絞

三 備も爰に忍ぶの
二 白き哉見れば更る夜に

あたる橋はなごり霜の
源の波は袈裟の前

三 歸りたうりて待ちあひて
六 すき哉うかい盛遠の
四 音に敬馬ろき袈裟の前
四 盛遠馳寄れ袈裟の前
四 何進きかす歸られ
五 共に相果ては身のみ
四 何まらも成れ其時

三 假寝ながらに外へ給ふ
五 坪の雨をいそぐ入る
四 紙燭羌出見だま人が
三 さきに何れ程いづれ物
六 郎詮波は殺し我も又
四 沖にも磯にも寄つたぬ
四 覺り給へと云すて水

かけ入えとする袖袂

思案に暮させ給ひが春

斯くまが厚き思百

尤れど涙の阿るうへは

窈かに亡ひ給へかーと地

減残つむりらばり乃

なほも声残ば打ひりめ幸

暫し止めの袈裟の前土

や、何れを是れ盛遠殿金

今は何とぞいふもむ九春

共に心も安かるまど土

仲し露おける言の葉に

色も見せず驟つ土

暫ら忍び待ち給は土

時分残計り移やの火残

乱れ髪にて臥たるが

本望遂げさせ給ひ候へ

合圍の時残まの声土

消えん命が果敢たれ土

素より丈の身に代り

座敷に歸り何げなき

吹き消し合圍申すべ二春

涙にしがたけり土

約束かたき言ひ土

風の前のなる土

正悼しや袈裟の前土

死なん心残知らせ土

風情よろほお沖の石土

案帳の前

人あり知らぬ袖の上よ

抱き上げつ自守詰め

浅き縁と知るなれば

消えん物茂撫子の

永き真跡の心ありとも

せめて名残に母の顔

別れとあもい定めんと

わいり花なほ為若

さても悲心や斯ばかり

如何なる霜も見ぬ内に

別れに心おろかされて

なつん事さう恨み

見も見られ今生の

顔羌寄る愛し給へば

為若わびへ眼は覺

何たりはぐかり漸くに

實にや世にあらん人々の

我身空しくなるなれば

さしてさう歎かせ給ふは

前世いかなる因縁か

おもいの淵に沈められ

ワツト泣き出た泣ふらう

賺しおむらせ給ひける

子供持より情け知る

跡にすます母上の

ゆりせ給へ不幸の罪

何だ浪寄するはだ人の

せになり代るつれなき哉

誰もかづげんづげの櫛

洗うに上げたる黒髪の

乱れぬ筋は示さん

鬢短かに切り捨す

露深き浅茅が原に迷ふ身の

五 いとゞい 崎路に入るが悲しや

涙ににどむ水莖乃

痕もどろに書き流す

忍び音になく不如歸

血吐く程の風情なり

折しもさし申る三更乃

遠寺の鐘は無光塔告げ

哀別離苦のねやの火残

心と共に吹き消し

五 知死期まゝ間が切なけれ

三 知死期まゝ間が切なけれ

小督の局

下じ候

斯も仲國は

馬より下りて窺へど

四 聞しが如きは折戸

是は宣旨の由使

五 彈正大弼仲國まゝ候が

此戸は開かせ給へかり

小督の局下

九三

九二

かゝのふ声に良のそ

賤が伏家に内裏より

所や遠い侍りなむと

仲國は突と内に入り

身ッ失させ給ひより

夜も眠らせ給はる

為に縮ませたもふ

細目に向けり女の童

向の宜旨のあそび

聞つ折戸押あけり

なごて隠れさせ給ふ

君には供はも聞召されず

畏けれどもは壽命は

りわの空も思召されば

書以覧候へ

小督は書頂給ひ

二夜三夜深返り

理せめて哀れなれ

漸々認めたまひ

餘人なれば先も

石琴遊ばされ其砌

女の童へ進ませば

目には泪の玉櫛

遂に泣伏し給ふ

暫く向りて返り

仲國は更に喜ばず

春花の朝秋月の夕

笛の役にと召され

仲國なかつくにより候こころはずや
得えずは忘わすれ給たまふ事こと三番
紫いば垣かきの根ねに汗あせ敷して
かこよばすやが女メナ氣キの
六河むつがはれば通とほらせ給たまへか
かくまを思おもはせ給たまふこり
りれも聞きこたむむけむ
二号

數かずなりぬ身みもかすがに
目めにからむ其そのまでは
月つき下かに一ひとと夜よ明あさん
小督せうとくも向むかはれと思おもへか
物もの數かずなりぬ自みづから我われ
世よにちほけな事ことはから
入道にゅうだう殿どののふよのふも
九六

怨うらみ我われ含あまを給たまふ事こと別
我わが大君おほきみの爲ためなす
瀬せにも瀬せにも身み我われ投なげ
今日けふまがながり侍はやくりは
明あけなば大原おほはらの別所べつしょへ
斯かくは一曲いつく彈たまト奴やつと
表着うわぎの袖そで我われ絞しぼり
九番

此この身みの上うへは厭いとはねど
諸もろも忍しのび出いなれ
早はやや兎うさぎも角かくもなりぬ我
うたや悪わるの執着しやくしやく心
思おもひかこいて候こころへば
小督せうとくの言葉ことばに仲國なかつくには
大原おほはらの別所べつしょとゆるがは
九七

小督の局下

一 落飾の心こころもや

二 いかで去る事ことの恨うらみなき春

三 思おもひ止とまらせ給たまへ春

四 君きみも待まち兼かねたまふらん地

五 別わかれの袖そでも虫むしの音ねも

六 いと濃こかに夜よはふけト

七 都みやこの方かたへ消えにける六

八 君きみの心こころ許ゆるりならず内うちは

九 重かさねて参まゐり候さかまぐ春

十 早はやや夜よも更あけて候さかまへ春

十一 甲からばと許ゆるり假かり初はつの

十二 志こころめりがちならる白露しらつゆの

十三 西にし更さらの空そらに鳴なる鞭むちも

十四 都みやこの方かたへ消えにける水

旅 順の魁

一 抑おさり文明ぶんめいは平へい和わと求もとめ

二 帝てい國こくの安やす全ぜんは保ほ障しょうするは

三 然しかるに露ろう國こくは清しやう國こくの盟めい約やく

四 みだりに満まん洲しゅうに占せん據こす

五 されば今いま上かみ皇みかど帝てい陛下へいかは

六 義ぎ憤ふんの王わう師しは進しんめ給たまひ春

七 東とう洋やうの治ち安あんは永えい遠えんに維ゐ持ぢ

八 夙つとに我われ國こく文ぶんの要やう義ぎなり

九 及および列れつ國こくに對たいする宣せん言げん皆みな

十 韓かん國こくの保ほ全ぜんは危あやうせとす十三

十一 露ろう國こくの暴ぼう虐くわく無む道どうは懲ちやうら給たまひ春

十二 維ゐ時とき明めい治ち三十さんじゅう有いう七しち年ねん

四 時さうりざい六日の朝まだき
運送船隊は
朝鮮海へ向ひ
ある一隊は引け
残る主戦の船隊は
其他の艦艦十隻
威風堂々列整然

六 我聯合の船隊は
四 仇世保の軍港乗り
仁川港の沖合
陸兵護送の任務
三 笠敷島富士八島
驅逐隊は引率
船艦相衝み進み行く

五 指し行方は渤海の
露西亞の主力の集れる
斯て八日の夕刻旗船より
是より敵船は撃沈
将率ともに雀躍
意氣衝天の勢
矢は射る如し朝潮

六 湾口扼す旅順口
軍港なりと知らる
我驅逐船隊に對
一同成功祈る信號あり
必ず成功すべき誓
浪は蹴立ち猛進す
立つは煙か白雲か

旅順の艦

霞にまがふ曉の

音すすまよと朧夜は

影うすれゆく薄雲も

寄する漣音もなが

真夜中頃に旅頻近進

宛然眠る就駕の如く

撃れんじりも知家り

空にといろく雷乃

照らす電いらめり

東雲近く晴れ渡り

斯く三隊に列隊備へ

警備急る敵艦は

我集のはやあざふ

おれが放り氷雷よ

たちまちバツト水煙

夢渚共に船底も

され共数多の敵艦より

面致向けむ様な事も

豫て鍛へ一技倆致

砲煙彈雨致物とせす

水雷巧妙に命中

敵艦周章少ためりて

打破られて傾きたり

撃出す砲弾猛烈え

大膽不敵の我軍は

頭す時は今此處に

敵艦めかけ發射する

まだたぐいまに二三艘

殊勝の魁

痛手我負ひて遁れが
 此時残餘の敵艦あり
 我進路妨げられど
 旅順口の外洋に
 凱歌あげて悠然と
 いと勇々光景よ
 是れ開戦の勝利なり

終に沈没したりわ
 探海燈は振り照ら
 小に襲撃の功は収め
 我艦隊は集合し
 南は指しを引揚しは
 是れ開戦の勝利なり

大正四年二月十四日印刷
 全 年二月十八日發行

定價金參拾錢

作曲 水也 田旭嶺

發行兼印刷者 前田梅吉

大阪市東區南渡邊町八番地

發行所 前田文進堂

電話東四九九八
 表替段一二四七三

東京市神田區表神保町十番地
 巖山堂書店

禁轉載

琵琶の起源と作者

琵琶は其昔印度に生れ、支那に傳はり而して日本に渡來せしものにして、平家琵琶滅亡後曲節野卑に流れ座頭琵琶に崩れしを旭翁橘智定氏多年苦心の結果茲に完全なる筑前琵琶が出来たのである、歌の作者としては工學士玉蘭遠邑容吉氏が敦盛海洋島等を始めとして苦心に苦心を重ねられ今日に至つたのである、橘旭翁氏遠邑玉蘭氏の功勞や實に偉大なるもので有る、尙九州には今村外園、南部露庵氏等の作者が有る。

◎習得者の心得

- 一、琵琶は歌ふものにあらずして談^{カタ}るものであるから一言一句文章の意味をよく理解して歌中の人と成り演奏すべし。
- 一、筑前琵琶の特長たる流しの内、春節は艶音にして優長なる事恰も春花に對するが如く、夏節は強音にして森嚴なること初夏新緑發生の感ある如し、秋節は清音にして洒落假令ば露夜明月を眺むるが如く、冬節は愁音にして乾燥恰かも木枯の梢頭を吹くが如し、又山越節は舊來の筑紫節にして最と婀娜たる調子なり、旭節は右と正反對の調子にして詩吟の趣あり、春節は七の音調にて起り、夏節は六、秋は五、冬は四より起ると心得べし。
- 一、初學者は琵琶の合の手（彈法）と歌と連絡調和せぬものだが此合の手は歌詞の喜怒哀樂を一層完全に表はすものであるから歌の研究と共に彈法の研究を怠つてはならぬ、例せば悲哀の合の手五號、十一號等

の手も弾き法が悪ると少しも悲哀には聞へない、折角一生懸命に歌つて悲哀を表して居ても合手の弾き法が悪ると爲めに歌を殺してしまふから弾法をおろそかにしてはいかぬ、悲哀の手は悲哀に勇壯の手は勇壯に弾かれればいけない、即ち弾法の功拙は歌の生死に關するものである。

一、琵琶の習得法—初學者は初めから難つかしい歌曲を習ひたがるものだが小學校生徒が大學校の學科を習つて解る筈が無いのと同じ事で段々と初傳、中傳、奥傳、皆傳と階段を踏んで行かればいけない、又一つの歌曲を一日でも早く揚げて數ばかり進みたがる人があるが大變にいかぬ事で一曲がよく腹へ入つてしまへば次に習得すべき歌曲は容易に解る事が出来る、然るにどの曲もく荒覚えにして置くと前の前から忘れられてしまふからよく注意すべき事である。

一、聲の練習法—聲は必ず腹から出さぬと聽者に感動を與へない、聲の悪るい人でも毎日練習さへ怠らなかつたら自然に出る様になるもので

ある、又どれ程調子の高いよい聲の出る人でも調子の底い先生に習つて居ると知らずく調子が底くなるものであるから自宅で稽古する時毎日一回だけ演奏會に演奏するつもりで自分の調子より半本又は一本ぐらゐ高い調子で一時間ぐらゐ練習するのがよい、然らば知らず知らずの内に聲量が増えて来る。

左に音聲研究に際して注意すべき條項を示して置く。

- 一、酒、酢、わさびの如き刺激物を飲食せざる事。
- 一、夜更かし及び朝寝をせざる事。
- 一、演奏せんとする前多量に喫煙すべからず（禁煙に越す事無し）
- 一、茄子の類を食さぬ事。
- 一、演奏せんとする五時間程前に肉食する事。
- 一、演奏せんとする三十分程前玉子を食する事。
- 一、演奏前には端座してなるべく身體を安靜にしてあまり歩行等せぬ事。

一、姿 勢—何より目立つて見えるのは彈奏者の姿勢である、端然と姿勢を正して居ると聽者の方でも勢ひ眞面目に成つて聞く氣になるが彈奏中に首を振つて見たり歌曲が佳境に入りつゝある場合に不眞面目な姿勢でギロリ／＼と聽者の顔を睨廻したりすると折角身を入れて聞かうと努めて居ても悪感情が起つてつひ悪騒ぎの一つもする様になるから注意せねばならない。

一、歌詞の間違—琵琶の彈奏者には歌詞の間違つた處を平氣でやつて居る人が有るが心ある人が聞いたらよい物笑ひになるから充分に文章は注意して間違ひの無い様にせねばなりません、本書に關し曲節の不審等有し時は切手封入の上御聞き合せに成れば直ちに回答致します。

綠水會長

南區千年町

水也田旭嶺識

既刊春の巻目次

君の代 敦盛段上
 敦盛段下 城山
 小督局 備後三郎
 錦の御旗段上 錦の御旗段下
 赤垣源藏 月照
 常陸丸 備後三郎
 平野次郎 白虎隊
 廣瀬中佐 蕾の花
 曾我 木村長門守
 勾當内侍 以上

既刊夏の巻目次

春日野 臺灣入
 河内の宿 松の廊下
 扇の的 石童丸
 太田道灌 四條暇
 竹林只七 叢雲
 宇治川段上 宇治川段下
 湊川 梅若丸
 海洋島 靜御前
 以上

既刊秋の巻

川中島
 湖水渡
 夜の鶴
 伏見の吹雪
 佐渡の若竹
 佛御前
 泉の三郎
 小楠公
 勸進帳
 義民の亀鑑
 隅田川
 吉野靜
 以上

既刊冬の巻

大高原吾
 櫻井の驛
 橘中佐
 伊賀の曙
 菅公
 護良親王
 義士の本懐
 靈馬の連
 菊水
 高田馬場
 南部坂
 以上

178
160

雪の巻既刊

菊の礎
項羽
高山孝九郎
山科の別
屋島
櫻田の泡雪
名和長年
山崎合戦
梅若丸
盆栽樹
稻村ヶ寄
沖積介
朝比奈三郎
以上

月の巻既刊

實盛
蒙古の冠浪
千手の前
船坂山
濡衣
小松原下
名剣日本蹄
金品南山
弓矢の譽
姫婆御前下
小督局下
旅順の魁
以上

花の巻既刊

別れの盃
小袖曾我
荒乳の闇
滑藤原信繁
同國盡し
乃木將軍
六代若下
芳流閣
吉野山下
七騎落
以上

筑前
琵琶
端唄
集
近刊

終

